Nara Women's University

# 資料:平成18年度幼小合同公開保育・学習研究発表会記録



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 奈良女子大学附属幼稚園 幼年教育研究会<br>公開日: 2010-07-06<br>キーワード (Ja): 学び, 遊び, 幼小接続<br>キーワード (En):<br>作成者: 柿元みはる<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10935/1656 |

# 資　料

## 平成18年度 幼・小合同公開研究会記録

**―資料―**

## 幼小合同公開保育・学習研究発表会記録

―文部科学省研究開発学校指定　第１年次研究発表―

（※附属小学校との合同開催で行う）

**◆主　題**　「確かな学び　確かな力」

幼稚園　―主体的に生活する中で「ねばり強い力」を育てる―

小学校　―確かな力を培う学習法―

**◆期　日**　平成19年2月15日（木）・16日（金）　＊幼稚園は15日のみ

**◆日　程**

《第１日目》2月15日（木）

―幼稚園―

8:40 9:00　11:20 11:30　12:15　13:15　14:30 14:45　16:15

| 受付 | 公開保育 | 移動 | 全体会 | 昼食 | 分科会 | 移動 | 講　演 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

―小学校―

8:15　8:45 9:15　9:30　10:15 10:30　11:15　11:30　12:30　13:30　14:30 14:45　16:15

| 受付 | 朝の会 | 移動 | 公開学習① | 移動 | 公開学習② | 移動 | 公開学習①の協議会 | 昼食 | 公開学習②の協議会 | 移動 | シンポジウム |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

《第２日目》2月16日（金）

―小学校―

8:15　8:45 9:15　9:30　10:15 10:30　11:15　11:30　12:30　14:00 14:15　15:30

| 受付 | 朝の会 | 移動 | 公開学習③ | 移動 | 公開学習④ | 昼食 | 分科会 | 移動 | 講　演 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 低学年集会 | | | | |

**◆内　容**

■公開保育（9：00～11：20）

| 学年 | 保育内容 | 保育者 |
|---|---|---|
| 3歳児 | 好きな遊びをしよう<br>～いろいろなこと　やってみたいな～ | 柿元みはる・八田智美・加藤菜穂 |
| 4歳児 | 好きな遊びをしよう<br>～作ったもので遊ぼう～ | 辻岡美希・松田登紀・中村真由子 |
| 5歳児 | 好きな遊びをしよう<br>～劇場ごっこをしよう～ | 竹内　愛・飯島貴子 |

■全体会（11：30〜12：15）

学長挨拶　　久米　健次　（奈良女子大学長）

研究発表　　松田　登紀　（附属幼稚園教諭）

園長挨拶　　浜田　寿美男（附属幼稚園長・奈良女子大学教授）

■分科会（13：15〜14：30）

《A　－幼稚園での学びを考える－》

提　　案　　辻岡美希（幼）　八田智美（幼）　阪本一英（小）
指導助言　　松本健義先生（上越教育大学助教授）
司　　会　　本山方子（奈良女子大学助教授）

幼稚園からは、日頃の保育でのエピソードの中から、「色水遊び」について取り上げ、各年齢ごとの学びや色水遊び・自然物に関わる意味について、小学校の阪本からは、低学年での体験学習が学習意欲につながるということを提案した。指導助言者の松本先生からは、モノに主体的に関わって、自分にとって意味のあるものに作り変える時に学びになること、周りの人と一緒に体験することで互いの世界を共有し「知」につながることなどをお話いただいた。

《B　－学力を支えるコミュニケーションを考える－》

提　　案　　飯島貴子（幼）　加藤菜穂（幼）　谷岡義高（小）　荒木ユミ（中等）
指導助言　　森脇健夫先生（三重大学教授）
司　　会　　西村拓生（奈良女子大学助教授）

幼稚園の学級全体活動での話し合う場面における言語発達の過程と、小学校・中等教育学校の児童・生徒の現状を発表した。コミュニケーション力の低下を起こしている背景を考え、学校教育ができることは何か、その中で特に、幼児期に大切にしておくことは何か、言語を含めた表現として考えることが必要であると指導助言を頂いた。

《C　－異校種間連携を考える－》

提　　案　　柿元みはる（幼）　竹内愛（幼）　日和佐尚（小）　野上朋子（中等）
指導助言　　奈須正裕先生（上智大学教授）
司　　会　　浜田寿美男（附属幼稚園長・奈良女子大学教授）

7月に行った中等教育学校サイエンス研究会が小学校・幼稚園で行った「かがくのひろば」の実践事例を中心に子どもの学びやその後の様子を発表した。指導助言者の奈須先生からは、他校種の教育との違いをわかることで、当たり前のように行ってきた自分の教育を再確認すること、そこで根拠がないものがあれば、他校種から学び取りながらもう1度その意味を考えることが大事なのではないかというお話があった。

《D　－幼稚園から小学校への育ちを考える（個人追跡）－》

提　　案　　松田登紀（幼）　堀本三和子（小）
指導助言　　岡本夏木先生（元京都女子大学教授）　麻生武先生（奈良女子大学教授）
司　　会　　天ケ瀬正博（奈良女子大学助教授）

附属幼稚園から附属小学校へ進学した子どもを対象にその育ちを追い、幼稚園教師が捉えた姿、小学校教師が捉えた姿を伝え合った。その中で、共通の視点やそれをどのような言葉で表すのかを探った。幼稚園から小学校への移行期間に必要な、また、長期的に子どもの発達をとらえるために、必要な教師の視点について指導助言を受けた。

■講演（14：45～16：15）

演題　「遊びの中での学び」

講師　神長美津子先生
（東京成徳大学助教授・
元国立教育政策研究所教育課程調査官）

**（講演内容）**

只今ご紹介にあずかりました神長です。よろしくお願いいたします。

朝早くから保育を公開して下さり、私も一日ここでたくさんのことを学んだ。学ぶとは何かと、本当に身をもって体験した。ちょっと紹介しきれない部分があるが、保育を見ながらいろいろなこと、いろいろな子どもたちと出会い、幼稚園教育で大事にしなくてはいけないことを確認することができた。また、研究開発校一年目ということで、貴重な研究の取り組みを伺うことができた。私も長いこと幼稚園におり、附属幼稚園でしたが、当時の研究開発校指定校としてずいぶん悩んだ。また、文科省に入ってすぐ開かれた打ち合わせ会が研究開発校連絡会であったが、その時にも、幼、小、中、高という一貫した流れの中で、幼児期の教育をもう一度見直すことになったが、小、中、高に比べて、幼稚園の場合、研究開発というカリキュラム開発は非常に難しいという思いがした。したがって、今日の発表を伺いながら、「あぁ大変だなぁ」という思いがしている。幼児期の教育は、ある意味では他の学校種とは異なり、独自性を持っている。幼児教育としての独自性と、学校教育としての一貫性を、研究開発研究の中でどう調和をとっていくか、ということについて、これからたくさん課題を解決しなければならないと思う。ただ、今日はカリキュラム開発につながる新しい視点をいくつか教えていただくことができたし、そのあとの分科会の中では、やはり日ごろの保育の問題やらカリキュラムの問題やら、いろいろな話題が出ていた。本当に盛りだくさんであった。消化しきれない私の話になってしまって、申し訳ありませんと先に謝っておかなくてはいけないと思う。私が全部すっきりとお話できればよいのだが、私も本当にたくさんここで教えてもらって、今はまだ整理のつかないようなことがいっぱいあるので、ますます先生方に宿題を渡してしまうかもしれない。

限られた時間の中で、遊びの中での学びということで、今なぜ幼稚園教育の中で『学び』という言葉を使うのか考えてみたい。これまでの幼稚園教育の中で、全く使われなかったという言葉ではないが、あまり使ってこなかった。どちらかというと、『遊びの中で経験していること』と表現したり、

『遊びを通して育っていること』という形で表現していたことを、あえて『学んでいること』という言葉を使いながら、幼児教育の成果を伝えようとしている。そのあたりの背景などについてお話をしていきたい。ここの中に研究開発ということで、新しい視点で関心を持って聞かれた方、参加なさった方もおられるであろうし、研究開発という言葉ではなく、日々の保育を見直すために、ということでここにいらっしゃった方々も大勢おられると思う。その中間点あたりで、私の話があるかと思うが、カリキュラム開発につながるもの、日々の保育の見直しにつながるもの、それぞれに伝わるものがあるとよいという希望的な思いをもっている。なぜ今、幼稚園教育の中でいわゆる『遊びの中での学び』ということに視点を置きながら、幼稚園教育を見直そうとしているかについて全体の話を進めていきたいと思う。

その本題に入る前に、今日見せていただいた保育の話から感想、感じたこと、考えたことを少しお話したいと思う。今日、朝こちらに着いたら、今日は幼、小、一緒に合同で行っているという話は伺っていた。「小学校も同時に公開しておりますのでどうぞ。」と誘っていただいたのだが、3歳、4歳、5歳と順に上がって、子どもたちの様子を見ていたら、ちょうど時間になってしまい、残念だというような思いがしている。この繋がりで小学校教育が見られると、子どもたちの発達が連続しているとか、学びが連続しているという、子どもの姿なり、幼小の連携の課題なりを見ることができたのではないかと思う。ただ、3歳児から4歳児、5歳児と見てきて、すごい発達の差があると思った。おそらく研究開発校で小、中、高という並びで話をしていると、幼児期は、“ひとくくり”で語ることが多いと思う。小、中学校はこうであるが、幼児期はこうだと。しかし、3歳と5歳というのは3年間の差、そこに発達の個人差ということもあると思われるので、3年間以上の差がある。

初めに3歳児の保育室に入ってみると、思い思いのものを作って遊んでいたが、作ることが楽しいのだろう。指導案の中にも作ることの楽しみということが入っていたが、今までは既成のおもちゃで遊んでいたが、自分の手で作ることができるようになり、そのことを楽しんでいる子ども達がたくさんいたと思う。ある男の子を見ていると、双眼鏡らしきものを作っていた。ただ、なぜ双眼鏡か、というあたりのところが最初は見られなかったのだが、その子の作っている様子を見ていると、作っているものはとなりの子どもはまったく別なのだが（となりの子ども達は立つか立たないかという、トイレットペーパーの芯を使って作っていたが、その子は折り紙をくるくるっと丸めた双眼鏡らしきものであった）作っているものは全然違うのだが、となりが「立った！」とか「すごい！」とか、先生が先ほどすごいという話出ましたけれども、「すごい！」って言葉がすると、ちらっちらっと見るのだ。その子を追い、ずっとお帰りの姿も見ていたら、どちらかというとわが道を行くタイプのお子さんだった。でも一緒にいるというのはすごいと思う。一緒に作ってはいないし、一緒に参加しているわけではないのだが、となりがやっていることにじっと見入っている、その目は好奇心があり、やはり集団で生活するということの意味を3歳児なりに感じた場面であった。ただ作ったものに対して、確かにそれを友達に見せたりとか、自分で確かめたりではなく、先生に確認を求めている。「これ」という表現なのだ。そのあたりが3歳児に対する先生の役割の大きいところなのだろう。言葉で「すごいね」ということよりも、私が双眼鏡と思っているだけかもしれないが、二つの筒を持って覗いていたのだが、先生がそこで覗いてくれる動作によって“受け止められた”、という実感を得ることが

できると思う。そのことがその次に発展してくる。幼、小という並びの中では言葉化ということが表現という中で求められているという話が出ていたが、確かに言葉化する前の段階である。共感ということが言葉でない、にっこり笑う、先生と一緒ににっこり笑う表情とか、同じ動きをしてみるとか、そういったことが3歳児の子どもとの関わりの中ですごく印象的に残っている場面であった。

途中からまた4歳児の保育室に入ると、4歳児になるとだいぶ先生との関わりが変わってきたし、遊びを見つけるというか、独自の世界を持っていると感じた。同じように遊ぶものを作るというような形で、それぞれに作っていたが、私が見るお子さんというのはだいたいみんなからちょっと離れたところにいる子どもがまず目に入ってきて、その子と、まわりの子ども達との関わりを見ていた。そこでも、ちょっと離れたところで、セロテープの輪っかにガムテープを色とりどりに貼っていたお子さんを見て、なんで作っているのだろう、何をしようとしているのだろう、ガムテープが切れないので必死の思いでやっているその子の思い、実現したいことは何だろうというようなことを思って見ていた。結構こだわっていた。あるところまでくると、それをどうしたかというところは、今日の場面では見ることができなかったのだが、作ることに非常にこだわっている、自分のものを作りたい、何かイメージして作っているということは、しっかり伝わってきた。お友達が作ったものの方が、おもしろそうなものなのだろう。作っているときにひゅっと見たらおもしろそうなので、その子に「それなんだろう」と、友達の作ったものを見に行く。友達がそれを飛ばしているところを見るということをしていた。しばらくしたら、年長組の子ども達がお話の部屋で、紙芝居をしてくれるというのが情報として入ったのだろう。とっさに先生のところに行って確認をして、「始まるよ」と言ったら、自分の引出しの中からカードを持ってきて、お話の部屋に行って、カードにシールを貼ってもらうという、そんな生活をしていたのだが、3歳とは違う。つまり、自分のこだわりと何らかの思い、実現したいという思いをもっているということと、しかし、その子の中に、同時に情報が入ってくる。友達が作っているものを一緒に楽しもうとか、「何か始まるらしい」、先生に確認しよう、というまわりでいろいろ起こっていることと、自分がやろうとしていることが、3歳とは違うなあということを思って見ていた。

そして、5歳の保育室に行くと、5歳はひとしきり遊んだ後の子ども達に出会った。ある程度遊んできた、ほとんどの子ども達が外でいろいろな遊びをしていたので、お部屋の中に残っている子どもは何人かというところであった。ちょうどOHPで遊んでいる二人の男の子の様子をしばらく見ていたが、カブトムシで何かを作りたいということだった。今流行っているムシキングであった。どこの幼稚園に行ってもムシキングというのは出てきて、その幼稚園、それぞれの文化があり、何でムシキングを作るかというのは、いろんな作り方があるということを勉強させてもらった。その子は、OHPにカブトムシか、クワガタかの絵を描きながら、ムシキングの話題をしていた。私はちょっとついていけない話題なので、言葉を再現することはできないが、作っているものはまったく別々なのだが、ムシキングのことで「そうだよなあ」というようなことを、お互いに言い合っていたように思う。でも、片方は、一生懸命ムシキングの物を作っているし、片方は切り貼って、ボールのようなものを作っていた。どうするのだろうと思って見ていると、OHPの台の上で戦わせるような形をとって、そこにボールを置いていた。最後に、片付ける場面になって先生が来て、その子ども達の様子を見ていた

のだが、その場面ではやりとりがあったというよりは、ひとつの話題を共有しながらそれぞれに作ることを楽しんでいたり、時々の会話を楽しんでいたという形なのだが、先生がひとつのかごを持って来てくれて、「しまうんならば、ここにしまっておきなさい。明日、続きができるよ。」というようなことだった。そのひとつのものが、このかごの中に、他のものは別な一箇所においてあったのだが、その子たちのかごが出てきた時点で、二人の会話は盛り上がっていたと思った。共有する場というものができると、イメージの共有ができあがっていく、明日もやろうというような話が出ていた。4歳の、いろんな情報が入ってくる、入ってきて一緒になるかというとそうでもなさそうな、つられて遊ぶのだが、共有する世界というのが非常にすれ違っている。そのすれ違いに時々子どもが葛藤を覚えている。「○○ちゃん、こっちだよ！」と言いながら、○○ちゃんは遠くの方に行ってしまう。一緒に遊んでいるが、葛藤の多い4歳児と5歳児はまた違う。イメージの共有というようなことがある、ある何かのきっかけがあるとできてくるという姿を見せてもらった。なぜこんな長々と3、4、5という保育の話をしているかというと、幼児期とひとくくりでものを考えてしまうと、おそらく見えない、見落としてしまうことがあるのではないかと思うのだ。3歳と5歳とものすごい発達の差、1年生と6年生も差があるが、むしろそれ以上かもしれない。ものとの関わりとか、先生との関わりとか、幼児同士の関わりということに、とても大きな差があるという、そのあたりの発達をどう押さえながら、幼児期は、ということを語っていくかが大事なことだと思っている。

研究開発指定研究の方の話に移ると、研究開発校という制度は、各学校段階を越えた形で研究をする。また従来の学習指導要領ということを越えてということが許される研究であるということである。幼稚園教育要領の場合には、非常に大綱化しているということもあるが、教育要領によらないとは書いていないが、小学校以上だと、学習指導要領通りでなくても良いということが、断り書きとして入っている。そういった意味で、幼稚園の教育要領は五領域にわたってできているが、その五領域を越えて新しい発想で研究を行うというのが研究開発校指定研究である。であるから、幼小連携ということで今、色々な地域で始まっている相互理解、相互交流といった幼小連携とは少し性格を異にしている、趣旨を異にしているということが言えると思う。各地域で幼小連携とか幼保小連携といった、就学前教育と小学校との連携として進められている研究は、いわゆる幼稚園指導要領や学習指導要領の中で相互交流、相互理解を深めていこう、一人の先生が長い目で発達や教育について語れるようになろうということを趣旨として行われている研究であるが、この研究開発校指定研究というのは、従来の学校段階の枠を超えて学習指導要領の枠を超えて行う研究である。何故そうするのかと言うと、やはり10年、20年先の子ども達の生活とか、発達とか、学校教育への課題ということを踏まえながら、新しいものを作り出していこうという制度であって、そういった意味では今の現実から少し離れたところで試行していくということになるので、少しというより、だいぶ違うと思う。ただ、最初にお話したように幼児教育は難しい。遊びは大事にして、幼児期の独自性ということは十分に踏まえた上であれば、冒険しても良い、教育課程の編成に五領域にはこだわらないで、この時期子ども達の将来の生活を踏まえたときに、大事なことを提案してほしい、ということでお願いするわけだが、幼児期は本当に難しい。変わらないというものがたくさんこの中に含まれている。時代がいかに変化しようとも、幼児期として大事にしていきたいことというのはたくさんある。もちろんそれは、学校教育全体もそ

うだと思う。教育として変わらないものはあると思うが、小・中学校というのは学習指導要領そのものも10年ごとに改訂していく、見直しをしていくということを行ってきた。幼稚園教育要領は、今は10年ごとに行うという形で平成元年以降、小・中学校の動きと合わせて行っているし、今現在、20年の改訂に合わせながら教育要領の検討も行っているが、そこの中での議論も全く同じである。時代がいかに変化しようとも、幼児教育として大事なことは何かということになってくると、戻ってしまう。最初は、この辺が問題ではないか、こうしたら前進できるんではないかといった話から始まるのだが、散々議論していると、現行のままで良いのではないかというところに戻ってくる。この辺の難しさがある。今日、先生方は研究会の発表や分科会の発表等、聞かれたと思うが、その中でここは自分達がやっている保育と共通なところがある、ここは少し違うということを感じながら、聞いてらっしゃったんではないかと思うが、研究開発校の1年目ということで、色々な取り組みをなさっていると思うが、必ずしもどこの園でもすぐにできる、それぞれに共通に考えられるというわけではなく、非常に先を見通した研究であるということを踏まえながら、今日の研究を受け止めていただきたいと思う。

研究開発校ということでお話をしたが、少し変わって、最近の幼児教育ということでいくつかお話をしていきたい。いろんな形で注目を浴びていると思う。先日というか、もうだいぶたったが、教育基本法という中で幼児期の教育が第11条に新しく入った。つまり、従来の義務教育という言葉と並んで幼児期の教育（家庭の教育というのももちろん新たに入ってきているのだが）というのを考えてみようということで、教育基本法の中に入ったということが、ひとつ大きなことである。幼稚園界の中では『学校教育の始まりとしての幼稚園』という言葉を使ってきたが、もう一度、『幼児期からの』ということで、見直してみることが必要になってきている。『幼児期からの』といった場合には、幼稚園だけに限らず、幼稚園や保育所という集団の教育の施設の中で、学校教育の始まりとして、何をどう身につけておいたらよいのかということについて、非常に関心が高くなってきているのがひとつある。もうひとつは、幼保の問題もだいぶ動き出してきている。戦後、昭和22年に学校教育法ができた。その中で、幼稚園が学校教育法で、保育所が児童福祉施設という形で位置づいてきた。そして、それぞれに充実をしてきたということだと思う。教育として、福祉機関として。しかし、保育所の場合には昭和40年だろうか、保育指針が通知されるようになった。指針ができたというあたりから、教育内容の充実ということも考える、つまり、保育指針が出来るということによって、おなじ3歳から5歳に関わっては、就学前ということを意識しながら教育を行うという形である。福祉の機関であっても教育ということを大事にしようということである。就学前の教育については、幼稚園教育に準じようという形で進んできているのだと思う。幼稚園の場合だと、平成になってから、預かり保育というのが平成6、7年あたりから、補助の対象になってきているので、保育所のように長時間預かるという形ではないが、それでもやはり母親も働く人たちに、少しでも幼稚園教育を受ける機会を作っていこう、ということが進んできた。であるから、幼稚園、保育園それぞれで、制度的には福祉の機関、教育の機関、ということで別々ではあるが、教育的な機能、福祉的な機能を併せ持つ、という形で動いてきているということは確かである。認定こども園という形が昨年度できてきているが、まだまだここの中で議論をしなくてはいけない、共通の理解をしなければいけないということがたくさんある。

実際にはまだ数は少ないが、いざ一緒になってみると、就学前の教育として何を大事にしたいのかということについては、やはり福祉のサイドと教育のサイドでは、だいぶ違う考え方を持っている。例えば、クラスの考え方一つがだいぶ違う。学校教育というのはクラスを持つということが当然であるし、同年齢の子ども達でクラス編成をしていくということが基本である。人数が少ないところであれば、異年齢の学級編成ということもありうるかもしれないが、それでもやはり経験を積み重ねていくということについては、同年齢の子ども達で編成するということが当然と言おうか、できるならばそれが望ましいとされている。これは設置基準上当然のことだと思うのだが、それは小、中学校の学校教育では当たり前のことだと思う。併設、複式ということがあるが、それは本当に限られた地域で、限られた条件の中でである。やはり教育というのは積み重ねであるので、確かに異年齢でいるといろんなことを子ども達は学ぶかもしれないけれども、見通しを持ったカリキュラムの中では、基本はやはり同年齢だと思う。なぜこんなに強調するのかというと、幼保の話をしていると、そのあたりがなかなか一致できないところであるのだ。始め、それがなぜかということがよく分からなかったのだが、やはり福祉の立場から聞くと、同年齢の学級というのは非常に子どもにストレスが大きいという。8時間の子どもを預かるのに、同年齢で暮らしていたら、ストレスがたまってしまうのだと。確かにそうだと思う。切磋琢磨するというが、5歳になってくると本当に、力と力がぶつかっていく。そこの中で新しい関係が結ばれていく。それが子ども達の学級集団だと思う。そこの中で子ども達は成長していくと思うのであるが、確かに、4時間で終わって、その後預かり保育はあるかもしれないが、クラスの枠というところからは離れていくので、子ども達はその4時間というのはとても意味があるのだと思う。でも長時間になってくる子ども達にとってみると、結構それがストレスなのだ。となると、異年齢を基本にしながら、同年齢をどう組み合わせていくかというということが問題なのだという話を、私は保育所の先生から教えてもらったのだが、そういうものの考え方をするのか、学校教育として当然と思っていることが、実は一歩離れてみるといろんな見方ができるのだ、と感じた。幼保の問題を話していてもとても長いのだが、課題はたくさんある。担任の問題にしても、教育内容にしても、非常に課題がある。ただ、国民的な期待としては、就学前の子ども達は同じ教育を受けて、義務教育をスタートさせてほしいということなのだ。研究開発の場合には、幼稚園と小学校という中で考えているので、長時間とかそういった問題はないのかもしれないが、やはり子ども達のこれからの長い10年20年という中では、もっと長時間幼児期の教育を受ける子ども達が増えてくるということも予想される、ということを考えると、本当に幼・小とどんな風につながっていったらよいのだろうかと思う。

そういう中で、ご存知だとは思うのだが平成17年の1月に、中央教育審議会の答申として、「子どもを取り巻く環境の変化をふまえた幼児教育のあり方について」が出された。この中では、これからの幼児教育の充実として、家庭、地域社会、幼稚園や保育所という集団の教育施設の3者の連携、3者が相互に関わり合いながら、子ども達の生活を豊かにしていこうという視点で、教育を行っていこう、連携を進めていこうということがひとつ出されている。もうひとつの視点として、発達や学びの連続性ということで、幼児期の教育と、小学校教育との連携の推進ということが挙げられているわけである。その発達や学びの連続性というのは、幼・小だけではなく、子ども達の家庭での生活が大変

変わってきた。子ども達の家庭での生活が変わったということは、経験することが変わってきているわけであるから、当然発達にも非常に著しい個人差が見られる。そういう中で幼稚園教育というのは、もう一度一人ひとりの発達ということを踏まえながら、幼稚園教育を行い、そこでの成果をしっかりと小学校教育につなげていく、伝えていく、ということを考えるようにと答申が出ている。幼稚園、家庭、地域社会という3者のつながり、ある意味では横のつながりだと思う。家庭から幼稚園、幼稚園から小学校という時間軸、そのような発達の流れ、生活の流れ、学びの連続性ということを十分に踏まえながら、幼児期の教育を考える。幼児期の教育だけがこうです、ある意味では幼児教育の独自性も含んで、こうですよ、ではなく、その成果をいかに小学校教育に伝えていくか。小学校教育の立場からすれば、幼児期で経験してきたこと、学んできたこと、育ってきたことを受け入れて、小学校教育をスタートしていくという体制作りが、今後の幼児教育の充実という中で述べられている。今、各地域で行われている幼小連携、学校間の連携、相互理解、相互交流という形は、発達や学びの連続性というあたりから、もっとお互いをお互いが「違っている」ということをしっかり理解し合おう、というところからスタートしてみようということで始まった研究である。そういった研究、相互理解、そういう交流ができる体制があるということが広がっていくということと、研究開発校でのカリキュラムの一貫性の研究とが重なり合う中で、10年後20年後の新しい幼児教育を作っていけると良いと思っている。いろんな意味で、幼保、幼小、また家庭や地域という中で、幼児教育というのは非常に見直しをしなくてはいけないというのが、最近の幼稚園教育、幼児教育で言われていることであると思う。

本題の、まず「遊びの中の学び」という、あえて「学び」という言葉を使いながら、幼児教育を語ることが必要なのかということになっていくのだが、そういう状況の中で、今いろいろな問題が指摘されている。今日の発表の最初にもあったが、子ども達の生活が変わってきている。当然と思うことが、子ども達は体験していないし、何かをやろうとすると大変なのだという話が最初にあったが、幼児を取り巻く環境の問題は非常に大きいと思う。少子化の問題もあるし、情報化の問題もあるし、女性の社会進出の増大ということもある。いろんなことが子どもを取り巻いている。子どもが変わったというよりは、子どもを取り巻く環境が変わった。そういう中で、本来体験すべきことを体験せずして生活をスタートしているということが、その現実だと思う。私も20年幼稚園の先生をやっていたが、私の記憶の中にある最初の子ども達と、10年前であるが最後の子ども達と、またこういった機会に見せていただく最近の子ども達は「あぁ、ずいぶん違うなぁ」と思うことがある。本質はそんなに変わらないのだろうと思うが、遊び方、遊ぶ内容はだいぶ違うと思う。

ある園に伺ったときに、なかなか遊びだせない子どもが多く、入園当初というのは結構大変だということであった。家庭での生活の差ということを考えたら当然なのだが、大体子ども達というのは5月の連休を過ぎると、だんだん「幼稚園はおもしろいんだな」、「いろんなものがここにはあるんだな」ということを思って、子どもから動き出してくると言う。しかし、なかなか動き出さない子もいるそうだ。今日も3歳の様子を見ていたが、3学期というのは先生の手を離れて子ども達同士の関係というのができてくると思うのだが、（基本的にそれが問題ということではないが）先生の中で安定しているお子さんがたくさんいらっしゃるなと思う。すごくいいことでもあり、先生は大変だなというと

ころもある。そのある園では2年保育のお子さんで、3年・2年混合のクラスであったが、4年間家庭の中でお母さんと一緒に向き合って生活していたお子さんなので、なかなか園生活に馴染めないと言う。それでも先生方が手を変え品を変え、幼稚園にはこんな楽しいものがあるんだよ、ということを環境の中に意図して置いておくということをするのだが、その子の目には全く留まらないのだそうだ。だから、保育室にある時間いると、職員室の方に「せんせい」と、事務の先生の隣に座っていることがよくあると言うのだ。普通、4歳の子どもというのは、例えば粘土など、入園当初であるから土粘土ではなかったと思うが、粘土を出すととても喜ぶものだ。可塑性に非常に富んだ素材であるから、自分の働きかけ方でいろんなものができてくるし、見立てができるし楽しい。見立てができるというのはとても楽しいことだと思う。そういったことを繰り返す中で、遊びが広がっていくと思うのだが、その子はそういった物に、『おもしろそう』という表情を全く見せないと言うのだ。ある時、保育室があなたの部屋だということを知らせたいために、その子が一番好きなものを用意しようとお母さんに聞いてみると、オセロゲームが好きだということだったそうだ。お母さんとよくなさってたんだと思うのだが、オセロゲームを用意してみると、先生と一緒にやろうとする。先生と一緒にやっていると、子ども達というのは先生と誰かが一緒に遊んでいると必ず寄ってくると思うのだが、ブロックを持って寄ってきたり、粘土を持って寄ってきたりして、先生の周りで見る取り巻きが出てくる。しかしその子は、寄ってきた子たちのブロックや粘土がオセロゲームに少しでも触ったりすると、ぱーんとはねのけるくらいに、先生との関係に固執し、それ以外は「いやだ」という表情をするのだそうだ。そんな話を、9月に行った時にこの子は実はそうだったんですよという形で伺った。9月の時点ではそこまではいっていなかったが、遊びだすまでにすごく時間がかかると言う。遊ぶということは、子ども達のその子その子の世界を広げていくものだと思うのだが、教育要領の言葉の中に『自発的な活動としての遊びは子どもにとって学習です』ということが総則に入っているが、それくらいに子ども達にとって大事なことであるから、遊びの環境ということには先生方が苦心なさってそれぞれの時期に応じた環境を作ってくる。しかし、これまでの子ども達はその中で、自分の興味や関心を持って動き出して来たけれども、今は動き出さない子どもがいる。ある意味では体験不足と言ってしまうと簡単かもしれないが、深い問題がそこの中にはあると思う。

一方、そういう子どもに対して、やはり保護者の見方も大変だと思う。遊びと学習ということでレジュメには書いたが、子ども達の遊びは学習につながっていくんだと私達は思っているが、保護者の中には、遊びと学習という並列なのだと思う。一番分かりやすい言葉だが、「幼稚園でたくさん遊んでくれてありがとう」と、修了式になると必ず言ってくれる。そして、「小学校に行ったらいっぱい勉強します」と言って、幼稚園を修了していく。それは嬉しいことである。嬉しいことであるが、学習とはそういうものではない。その場では言わないが、小学校に行くと勉強が始まる、幼稚園は遊んでいればいいじゃないかという、そのあたりの学習観が、幼稚園教育を伝えていく、見えない教育の価値を伝えていくことの難しさを感じさせる。難しさを感じるということだけではなく、やはりこれからの学校教育においては、見えない教育であるが、幼児期のこの体験ということが将来の子どもの学び、学習の中で大変重要な体験をしている、そこにつながる体験をしているということに、保護者に理解してもらえるよう働きかけることが必要であるし、保護者が納得する説明、言葉というのが求

められると思う。早期教育に走る保護者に対するアンケートの中に、受験のためという理由はあるかもしれないが、全国的に見ると受験のためというのは非常に少ない。それでも通信の教育を受けさせたいとか、何かしなければならないと思う保護者のほとんどが、小学校に行ったらついて行けないのではないかという、小学校教育に対する不信もあるし、幼稚園教育に対する不信もある、そのあたりが問題だ。そのことを考えると、もっと幼小というつながりの中で子ども達の学力をしっかり支えているということを伝えていかなければいけないのだということを感じる。

更に、遊びをめぐる問題ということで挙げていくと、やはり幼小間の、かたや遊びを中心とする教育、かたや教科等の学習を中心とする教育の違い、段差、これを乗り越えて子どもが成長していくことをいかに支えるかだと思う。平成元年の教育要領、学習指導要領の中に生活科が入り、10年の中に総合的学習の時間が3年生以上に入ってきた。中学校以上も含めだが、随分学力に対する見方や考え方が変わってきた、確実なものがそこにある。しかし、やはり子ども達にとってみると、遊びを中心とした生活から1年生になるというところにはやはり段差があると思う。今日の5歳の子ども達のおやつの場面を見せていただいたが、納得がいくまで、心ゆくまで遊ぶということだと思うが、なかなか片付けしようとしないお子さんがいた。先生はしっかりと「じゃ、待っててあげるからね。」という声をかけて、そうしたら周りの子ども達が「長い歌を歌って待っておこうよ」と言った。長い歌というのもとてもいいなと思ったが、周りの子ども達が歌っていると、急に子どもが立ち上がって「終わった」ということを言って、最終的に間に合ったのだが、多分気分転換をしてきたのだと思う。離れたところにいたので、遊びが終わったというところまでいったかどうかは分からなかったが、多分その子なりに納得して次にいこうという気持ちになったのだろう。「終わった」という言葉はそういうことだと思う。それはとても大事なことだと思うのだ。チャイムが鳴ったから始まるという形ではなく、ひとつの区切りをつけて、さぁその次へと、その思いはとても大事だと思う。幼稚園には幼稚園の時間があり、子どもの時間がそこには流れている。子どもの時間という中で、気分転換ということができていくのだと思う。そのあたりが、1年生になってくるとだいぶ変わるというのは、現実なのだ。ここの小学校の場合には、今回の研究会のようにお互いに研究の内容に関わって話し合うということができていると思うので、そのあたりの子どもの見方とか授業の進め方等々において十分な配慮がおありになると思われる。しかし、必ずしもどこでも同じようにできているわけではないので、そのあたりをどうするかということだ。今、相互理解・相互交流ということで全国的に進めていることは、幼稚園での子どもの見方や小学校での教育の進め方を、お互いに見合いながら、自分のところで何をしたら良いのかを考えてもらおうということだと思うのだが、遊びを中心とする幼稚園教育というところに理解を得るのに時間がかかるということは現実である。そういった、遊びを巡る様々な問題があるということである。

そういう中で、文部科学省で中教審答申が出た頃（平成17年1月）、と合わせて、国立教育政策研究所教育課程研究センターで、「幼児期から児童期への教育」について、就学前に何を育てておいたら良いのかということのひとつの指導資料を作った。何故その時期に作るかについては、色々な背景がそこにあるのだが、幼保、幼小の話し合いが進む中で、なかなか幼児教育に対する共通理解が得られない。そのあたりをひとつの形に示していこうということで、指導資料を作ることになった。当時

は文科省の中で指導資料を作りにくい状況であったので、教育課程研究センターの中で作ることになった。教育課程研究センターというのは、幼小中高の教育課程の研究センターで、幼稚園の指導資料を作るというのは異例中の異例なのだが、当時のセンター長、幼児教育課の課長の配慮もあり、ひとつの形に残しておくことができた。前置きが長くなったが、その中で幼児期、小学校入学までに育てておきたいこととして2点挙げている。幼稚園の教育をまとめているのだが、ひとつは、子ども達の生活体験を考えると、幼児期にふさわしい主体的な生活の中で子ども達の生活体験を豊かにしていこうということ、また、人間関係をしっかり育てていこうということ。同年代同士の集団の生活の中で、体験の豊かさと、協同性を含んだ人間関係をしっかり考えていくということがひとつである。もうひとつは、小学校以降の生活や学習の基盤を考えていこうということである。もうひとつは、と言うと、ここにふさわしい生活があり、もうひとつがこちらにある、これもあれもやらなければならないと聞こえるかもしれないが、視点を二つ持つという意味であって、生活体験を豊かにしていくことと小学校以降の生活や学習の基盤を作るということはつながっていくことだと思っている。ただし視点は二つ持って考えていこうということである。この二つの考え方は、今の検討中の教育要領の柱にもなっている。改善のひとつの視点になっている。小学校以降の生活や学習の基盤をもう一度見直していこうということになるわけであるが、私は長い間幼稚園の現場にいたので、実際の子どもの姿を話した方がうまく伝わるので具体的な子どもの姿でお話しする。例えば、片付けをするということは、幼児期にふさわしい生活の中にもあり、小学校以降の生活や学習の基盤としても大事なことである。片付けるということは、ひとつの行為に対してひとつのピリオドを打って、その次に移るという行為であるから、この時期に経験し、身に付けておかなければならないことである。それは、一斉に片付けられるとか片付けられないといった問題ではなく、その子の生活の流れの中で区切りをつけていくという作業である。先ほどの年長児の、片付けてみんなでおやつを食べるという場面もそうであったかもしれない。その時に、3歳、4歳、5歳というそれぞれの発達に応じた関わり方があるだろうと思う。3歳、4歳の片付け方を見ていると、片付けるという行為そのものに、明日の遊びへの願いが込められていると感じる。子ども達がよく片付けている背景には、「明日もこれで遊びたい」という、確保していくという意味が込められているように思う。

ある園で2年保育の4歳児の片付けを見せてもらった時には本当に納得した。午後、弁当後の姿であったが、おうちごっこや売りやさんごっこなどでそれはよく遊んでいた。これでは帰りに間に合わないのではないかと思うくらいに遊んでいた。帰りは2時ごろだと思うのだが、先生は1時くらいからそわそわと片付け始めた。一斉に始まるというのではなく、先生が一緒に遊んでいた子ども達に、「そろそろお片づけしようよ。お話も読みたいし、おうちの人がお迎えに来ちゃうと困るから片付けましょう。」というように、先生が一緒に遊んでいたグループから片付けが始まっていく。次第に輪が広がって、部屋の中がガタガタと、片付けの雰囲気が広がっていく。しかし、一向に片付けないグループがある。私がちょうど見ていたグループは、ジュースやさんごっこをしていたのだが、お人形に、ジュースに見立てたちぎった紙をヤクルトの空き容器に入れて、飲ませる真似をする遊びであった。とにかく周りは散らかっていた。ちぎった紙もたくさん落ちているし、積み木もいっぱい、ヤクルトの空き容器もいっぱいの中で遊んでいるのだが、一向に片付けない。片付けないと言うよりは、

その声がもしかしたら届いていないかもしれない。没頭し、夢中で遊んでいるという状態であったと思う。その子が片付け始めるきっかけが何かというと、先生を中心としてバタバタという音がなったり、ざわざわしてくるといった、片付けの雰囲気出てきて、「きれいになったね」「よかったね」という言葉も聞こえてくる、そのような中で、隣のグループが片付け始めた。その時にジュースやさんの女の子が「マクドナルドがしまっちゃった」と言って、今日はおしまいというのが分かったようだった。その後、ジュースを冷蔵庫にしまってこようということになった。つまり、片付けというのは生活習慣であって、集団の生活の中では必要な習慣であり、将来の生活や学習の基盤としても身に付けさせておきたいことであるが、3歳、4歳の「片付ける」ということは、子どもの自己実現に沿った遊びの中でできていくのだと思う。先生が怖い顔をして「片付けなさい！」と言えば確かに片付けるかもしれないが、その時は片付けても、習慣として身に付くかというと、はたしてどうかということになる。繰り返し繰り返しやればできると言うかもしれないが、幼稚園ではできても、一歩外に出て条件が変わるとできないという事になるのではないか。本当の意味で、身にしみて「片付けなくちゃ」と思うようになるのは、結構大変なことである。しかし、自己実現に沿った遊びの中では、子どもは結構一生懸命になるのだなと思った。先生がちょうどそこで「すごいね。冷蔵庫に入っちゃったね。明日も遊べるね。」と声をかけると、にこっと笑う。そのあたりが、将来の生活や学習の基盤にもなるが、幼児期にふさわしい生活ということにもなる。

しかし、5歳児が同じように片付けているかというと、決してそうではない。同じ園の5歳児の様子を見ていると、「1時になったら片付け」ということで、時計が書かれていた。最初に気が付いた子どもが、「片付けだよ。」と言い出した。その子はもしかしたら時計が気になってよく遊んでいなかったのかもしれないが、その声を聞いた先生が「もうそんな時間になっちゃったの？　本当だ、1時だ。早く片付けないと、お話の続きが読めないよね。」と言い、片付けが始まった。やはりみんなの生活の中での片付けである。先生が子どもの声に合わせながら、「じゃあ片付けよう。」という声を出していくと、子ども達が、片付けなければいけないと気付く。そのあたりが何度も言うようであるが、同じくくりとすると、小学校以降の生活や学習の基盤を作る、幼児期にふさわしい生活を通してということなのだが、4歳の自己実現に沿った遊びの中でというところから、修了間際の子ども達まで、非常に発達の差があるということである。先生の中に、幼児期とは何か、幼児教育とは何か、修了までに何を育てておきたいのかという意識を持って子どもと付き合っていくこと、その中で小学校以降の生活や学習の基盤が培われていくのだろう。その意識を無くしては身に付かないが、急いで小学校と連携してやっていかなければならないというものではない。急ぐことではないということを感じている。

自発的な活動としての遊びに対する指導のあり方、私達は、遊びの中で一人ひとりが充実するということを大事にしながら、環境の構成をするということをこれまでずっとしてきたわけである。学校教育としての幼稚園教育が、戦後スタートしたのだが、その中ではいつも悩む。幼児教育の独自性を十分に考えると学校教育としての一貫性が薄れる。学校教育としての一貫性を考えすぎると、幼児教育の独自性が消えてしまう。そこをどうバランスを取っていくかは非常に難しい。しかし、入園から修了までの期間の中の発達に応じた教育を考えることで、この問題が解決できていくのではないかと思う。発達に応じた教育というところでは、幼児期から児童期への教育の中でも、繰り返し書かれて

いることであるが、年齢に応じて発達があるわけではないのだが、幼児期前期の子どものものの見方や考え方、人とのつながり方、大人との関係、幼児同士の関係から、徐々に後期の子ども同士の関係が深まっていくのだと思う。その流れをしっかりと見据えて、カリキュラムを組んでいく。当然これまでやってきたことなのだが、もう一度、ひとくくりにしないで考えなければならない。ということは、修了までに何を育てておいたら良いのかということを意識することだと思う。

話があちこち飛んでしまうが、レジュメの中に自発的活動としての遊びと学びということを、ここだけは詳しく書いたが、確認の意味も含めて書いている。遊びを私達はずっと大事にしてきた。そして、教育要領の改訂の歴史、昭和31年、昭和39年、平成元年、平成10年という歴史が、先ほどの独自性と一貫性のバランスを、行ったり来たりかもしれないが、考えながら積み重ねてきたのではないかと思う。一貫性という言葉は、31年の教育要領の中には出てきているのだが、39年の改訂では、むしろ幼児教育の独自性を強調している。それは、時間割に基づく生活が幼稚園の中でも始まってしまった、子どもの時間が流れているはずなのにということが、指導計画を作った途端に変わってしまったという歴史もあり、39年の教育要領では独自性が非常に強調されている。それから25年は改訂されていないが、その中にいわゆる領域ごとに指導資料を作ってきた経緯がある。それが教科とは違うといいながら、教科と同じような形で幼稚園教育を取り扱ってしまったという歴史もあるということである。このあたりが長くなると、最後までいかなくなってしまうのだが、独自性という部分で、領域という言葉を持ち込んで学校教育としての一貫性を図ろうとしたが、なかなか行ったり来たりというところがある。

そして、今、遊びをもう一度考えてみようということである。その中でも、今までの歴史をしっかり押さえておかないといけないと思う。子ども達は遊びを通していろんなことが育ち、身に付けてくる。一番分かりやすいのがごっこだと思うのだが、ごっこ遊びの中では表現することもするし、言葉でコミュニケーションをとることもあるし、人間関係も育ってくるし、いろいろな技術を身に付けるということもある。子どもの生活そのものが非常に総合的であるから、生活の中に色々なことを学ぶことができるというのが、子ども達の生活であり遊びであると思う。ただ、そういったものを考えていくとき、何かを身に付けさせようと思って子どもの生活や遊びに関わっていくと、子どもの持っている子どもにとっての意味が失われてしまうようなことが遊びにはあると思う。つまり、遊びの持つ全体性ということであるが、子ども達が楽しく遊び、一人ひとりが自己充実する中で、このことを育てていこう、このことを学ばせていこうというように、ひとつの価値に焦点を当てていくと、子どもにとっての意味が失われていくというのが遊びなのだと思う。だから、遊びの指導というのは非常に難しい。遊びと学びということで、ここではこんなことを学んでいる、結果として学んでいるというのは分かるのだが、学んでいることを先に考えて子ども達の遊びを考えてしまうと、子どもにとって本当は楽しいはずの遊びが、いつの間にか、「先生、終わったから遊んでいい？」というように変わってしまう。そのあたりが、幼児教育を語るときに非常に難しいと感じる。遊んでいる中で子ども達が学んでいるということは分かるが、それを優先させてしまうと子ども達の本来の遊びの姿というものが薄れてしまうという落とし穴がある。

もうひとつは、学ぶということはどういうことなのか。これは、それぞれの分科会で出ていたこと

かもしれないが、私はAの分科会に出ていて、先生方の話を聞いたり、助言の松本先生の話を伺ったりしながら、「そうだなぁ」と確認したが、学ぶということは、対象と関わる中で色々なことを子ども達は経験しているわけである。これまでとは異なる新たな見方をするとか、新たな関係となっていく、その学び手自身が変わっていくことで、『学び』になると思う。Aの分科会の例で、松本先生が話されていたことだが、色水遊びをしている中で、子ども達は花に対する見方や考え方が変化してくる。今までは「きれいな花だな」で終わっていたものが、潰して色が出る、作り変えてその結果から新しい事実を知るということだと思うのだが、その話を聞きながら、子ども自身が変化していくことだと思う。そして、保育者として大事なことは、その変化を読み取っていくことだと思う。何を学んでいるか必死になって書き取っていくというよりは、この活動を通して、このものとの関わりを通してこの子がどう変わってきたか、そのあたりをしっかりと受け止めていくということが、遊びの中での学び、何を学んできたかを大事にすることであるだろう。教育要領の改訂をしているという話をしたが、やはり『学び』という言葉がいろいろに使われていて、(教育要領には使われていないが) それぞれの先生方の話の中に出てくる。これまでの幼稚園教育で言うと、『経験していること』や、『育っていること』だと思う。しかし修了間近になってくると、確かに『学んでいる』ということがある程度見取れるような気がする。もちろん、3歳、4歳に無いわけではないが、3歳、4歳では繰り返し同じ動きを楽しんでいるということがあって、だんだん積み重ねが4歳、5歳になると見えてくるのではと思う。学び手自身が変わっていくことを、どう見取っていくのかということである。いろんな捉え方があると思うが、知的な側面から捉えよう、情緒的な側面、感じるという側面から子ども達の変化を捉えてみよう、人間関係という側面から見取っていこう、体の動きから見てみよう、ということもできると思う。今まであまり意識していなかった分、修了までに何を育てていきたいかと考えたときに、子ども達の自己充実する遊びの中で、子ども達がどんなことを学んできているのかという視点から、遊びを見ることが大事であると思う。見えない教育が保護者や小学校の先生方に伝わるかというと、即つながらないかもしれないが、しかし、私達がそういう目、遊びを見る目をしっかり持って繰り返し伝えていくことで、この時期子ども達が経験していることをしっかり伝えていくことができるのではないか。そういったことを踏まえながら、小学校との滑らかな接続を図るためにということで、ここでは5つの視点を出している。

これは、中教審の答申、発達や学びの連続性が話し合われた議論の中で出てきたものを整理したものである。幼・小というのはやはりすごい差がある。しかし、幼稚園の中にも差があるのだということを先ほどお話した。3、4歳の子ども達の遊びは、興味や関心に沿った活動に置き換えられるだろう。次第に、興味や関心の中で子ども達が学ぶ。そこに子ども達の好奇心や探究心が生まれて、興味や関心に応じた学びが広がっていき、その上に、時間割に基づいた教科等の学習が積み重なっていくのだと思う。そういった流れでいくと、おそらく5歳から1年生にかけては、共通項が多いと思われる。この時期は、興味や関心も大事であるし、子ども達が何を学んでいるかということをしっかりと見取りながらその次を働きかけていく、積み重ねていくという努力も必要である。そういった、幼児期から児童期への流れを踏まえると、まず大事にしたいことは、園生活の中で行う子ども達の直接的、具体的体験を見直していくということ。ここでは「豊かに」という言葉で表現しているが、豊かな体

験が今まで以上に求められている。家庭や地域社会では体験できなくなったことがたくさんあると思う。3歳の保育室に大きな凧があったが、凧揚げは地域では全くできなくなった。そういう意味では、幼稚園の生活の中でたくさんのものを経験できる場を提供していくことが大事であると思う。『豊かに』というのは、多様性という意味も含んでいるのであろう。しかし、多様性だけで良いのだろうか。多様性から言ったら、幼稚園生活がとても忙しいものになるだろう。自然体験も運動体験もその他にもということで、とても忙しくなると思うのだが、多様性ということと、『豊かに』という言葉の中には、ひとつひとつの体験をばらばらに考えるのではなく、関連性を持って園生活を作っていくことが大事であると思う。ひとつひとつの体験から次の体験が生まれてくるということ。自然体験というのは分かりやすいが、例えば園外保育に行き、いろんな花を摘んできたとすると、次の日からの幼稚園生活で、見てみれば幼稚園にも同じような花がある、今まで幼稚園では遊具にばかり目についていたが、園外保育で見たあのお花が幼稚園にもあったということにもし子ども達が気付いたならば、その『気付いた』ということから、「○○ちゃん、おんなじ花があったね」と、友達やクラス全体に話題にしながら広がっていくということも大事なことである。

これもある実践であるが、5歳児が、『昆虫ランド』というのを9月に楽しんでいた。本当に豊かだと感じた。保育室の半分に雑草だが色々な種類の花が並んでいて、東京だったが、こんなに虫がいるのかと驚くくらいに、いろんな虫がいた。先生に「よく頑張りましたね」という話をしたところ、「きっかけは、子どものおじいちゃんがカブトムシの幼虫を1匹持ってきてくれたことなんです。」という話を淡々としていた。そのことを話題にしながら、子ども達が家庭で見つけてきたことや、登園途中で見つけたことを共有しながら、徐々に徐々に広げてきて9月の『昆虫ランド』という遊びにつながってきているらしい。そのつなげていく役割に、担任の先生の力があるのだろう。友達同士の話題をつなげていくということもあるし、ひとつの体験ともうひとつの体験をつなげていく、ひとつのものとひとつのものをつなげていく、子どもと子どもをつなげていく、子どもとものをつなげていく、そのような中で『豊かな体験』ができていくのだと感じる。多様性と、関連性を持って園生活のひとつひとつの体験を考えていくことも大事であろう。

二つ目の視点では、人間関係である。ひとりでは気が付かないが、ひとりではつまらないが、一緒にいると新しい世界が開けてくるということを、子ども達はいろんな場面で経験しているだろう。特に、幼児期から児童期にかけて、共に意味を作り出す関係は、しっかり育てていかなければならない。人と関わりあうと新しいことを学んでいくという中で、人間関係に対する新鮮な気持ちを持つことがとても大事なことである。しかし、幼児期では3歳も4歳も同じかというと、決してそうではない。先ほど話したが、3歳のとなりの子をちらっと見ながら、自分は違う望遠鏡を作っていたというあの関係は、共にいるという関係である。関わり合いは非常に少ないが、「あんなことができるんだ」「あの子はあんなことをしているんだ」という中で、共にいることを楽しんでいるのだろう。その次の段階は、共に遊ぶという段階だと思う。これは、4歳5歳で行ったり来たりしながら共に遊ぶ経験をしていくのだろう。ここにはやはり葛藤がたくさんあると思う。一緒にいると楽しいが、思うようにならない経験がたくさんある。4歳の子どもがいろんな情報を周りから得て、「一緒に遊ぼう」と声をかけるのだが、その子は遠くへ行ってしまう。断られた子は地団駄を踏んだようにしていたが、しか

し、そのような「一緒にいたい」という気持ちの中で、でも一緒にいると葛藤する中で、相手には自分と違う思いがあるということを子ども達は学んでいく。相手には自分に無い視点を持っているということを学び、次の段階の、共に意味を作り出す関係ができてくるのだと思う。つまり、入園から修了という中に、次第に行ったり来たりしながら、共にいるというところから共に意味を作り出すという関係をいかに育てていくか、そういう視点をいかに持つかということも大事であろう。

更には、話を聞く、伝え合う、言葉化、言語化という言葉になっているが、自分の思いを話す、人に伝えるということはとても大切なことである。しかし、3歳、4歳はそんなことは考えていない。本当によくおしゃべりをする時期である。つまり、経験したことを言葉にするということを、精一杯楽しんでいる。3歳の今日の帰りの場面も、みんな一点先生に集中していた。「僕のことを聞いてよ、見てよ」という形である。そんな風に自分の思いを受け止めてもらって満足していた。

幼小の連携を進めている話を色々聞くと、「話を聞いていますか。」「いや、聞いています。」「自分のことを言えるようになっています。」などと、話を言える、言えないという話になってくる。言える、言えないという話になってしまうと、おかしいと思う。ようやく5歳くらいになると、先生の援助とか話題とかそのようなことに関しては、先生がよほど吟味しなければならないが、伝え合いということが可能になってくると思う。しかし、そこからでき始めていくという視点から小学校では受け止めてもらいたいと思う。幼児期からのというあたりを、人間関係も言葉も、幼児期に完成するのではなく、幼児期からようやくそういった学習の体勢ができ始めてくる。しかし、先生が少し手を抜いたり、支えを止めてしまうと上手くできないのがこの時期であるから、当然1年生の指導の中にも支えるということをしっかり持ってもらいたい。子どもの興味や関心に応じた学びを展開するためには、その支えが必要な時期であろう。その辺が共有できると良いと感じる。

更に、遊びを通しての学習と、教科を中心とする学習の狭間をどう埋めていくのか、それは一直線ではないと思うし、次の段階にストレートにすんなりといける問題ではない。やはり段差はあるし、ある意味の段差は必要だろう。しかしそこを乗りこえて成長していくためには、やはり先生方の温かい子どもを見る目やこの時期の教育を語る言葉が欲しいと思う。そういった意味で、今日の研究会はすごいと思う。幼稚園の発表に対して、小学校の先生方がコメントする、そのようなことを繰り返す中で、ひとりの先生がそれが幼稚園であろうが小学校であろうが、この時期の教育を同じように語れるようになっていくのだと思う。段差を無くすという考え方よりもむしろ、幼児期に豊かな経験をしている、生活や遊びを豊かにしていく、それが徐々に徐々に小学校の学習につながっていくというその体制をいかに一緒に作るかということだろう。やはりその体制を保護者に伝えていく、この時期の教育を任せてくださいとしっかりと伝え、理解と協力を得る、「遊んでくれてありがとう。いっぱい勉強します」ではなく、安心して小学校に行ける体制作りが必要である。

いろんなところから、遊びの中での学びといいながら、幅広く今の幼児教育が抱えている問題等々もお話してしまったかと思うが、ちょうど時間のようだ。長い時間ご静聴ありがとうございました。今後の研究の成果を期待しています。